

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)

▲明治6年(1873)の丹南村地籍図
陣屋は「郷内地」とある。▲「旧丹南藩主高木
主水正陣屋址碑」
昭和12年(1937)。▲丹南遺跡出土の磁器
水滴 江戸後期~明治
初期の溝から出土。▲丹南藩立藩400年記念「丹南陣屋御
城印」 右：特別版、左：通常版。

十二代藩主高木正坦が明治元年丹南陣屋内に藩士子弟らを教育

NHK大河ドラマ「どうする家康」は、

国民的な人気番組です。主人公の徳川家康は、三河国(愛知県)岡崎城主松平広忠の長男として生まれました。慶長八年(一六〇三)、江戸幕府を開きました。家康には、三河以来の重臣として十六人の勇猛な武将がいました。

その中の一人が高木清秀で、初代丹南藩主の高木正次の父でした。清秀は、家康の天下取りの多くの戦いに参戦して武功を立て、高木氏は徳川家臣団で重要な役割を担っていました。

清秀の三男であった正次は豊臣方との大坂夏の陣(元和元年・一六一五)に際し、家康の直臣として参戦し、真田信繁とも戦い、戦利品を得ています。正次は元和九年(一六二三)、大名に任じられ、丹南藩一萬石として、丹南村に陣屋を構えました。丹南藩は江戸時代を通じて、一度の領地替えもなく、十二代正坦の時、明治時代を迎えます。

正坦は、文政十二年(一八二九)三月生まれ。嘉永元年(一八四八)八月、十一代正明から藩主を継ぎました。二十歳の時です。

明治元年(一八六八)、正坦は、現丹南三丁目の中高野街道と中央環状線交差点のすぐ西、来迎寺(融通念佛宗)東側に藩校の丹南学校を創設しました。そこは、丹南陣屋の北西側を占め、小字で「学校敷」とよんでいます。国家のための人

材養成を目的として、漢学者であった森餘山を教授として招きました。

学校は文学校と武学校に分けられ、各七人の教員によって担当されました。文学校は教授一人、大助教一人、中助教二人、小助教一人、助読生二人です。武学校は教授二人、大助教一人、中助教三人、小助教一人でした。今でいう事務員四人や、用務員三人も配属されていました。

生徒は六歳から十五歳までで、通学生約五〇名、寄宿生約十五名と定められました。藩士の子弟は入学が義務付けられ、他藩の子弟や平民にも門戸が開かれています。入学金は必要ですが、授業料は無料でした。また、十三歳になると、藩が負担料を出して、寄宿生活を送るようにしました。

その上、十五歳になると軍務局に入れて「馬術兵書」を学ばせました。馬場は、陣屋から数百メートル西南に行つた西除川右岸(丹南一・六丁目)にあつたらしく、のち丹南県操練場となったようです。

学科は、漢学・筆道・剣術・柔術の四科。生徒は、これらを文武両道として兼修することが求められました。毎日、午前は読書と習字、午後は武術を習いました。毎日の授業は、個人が素読や質問を行い、月六回は全校生徒で講義が持たれ、藩主正坦も臨席しました。

別に、生徒を学力別の小集団に分け、輪読も設けられました。春と秋の二回、試験が実施され、優劣については正坦

も加わり、優秀な生徒には賞品も与えられました。

しかし、丹南学校は明治四年(一八七二)七月に断行された廃藩置県によって、丹南県が誕生し、廃校となりました。わずか四年間の存在でした。この時は、十三代正善に継がれていました。ところが、丹南県も四月後の、同年十一月に堺県に編入され、建物も堺県に管理されたのです。

翌明治五年(一八七二)五月に、丹南・岡(以上松原市)と丹上・真福寺(以上堺市美原区)の四力村に下付され、郷学校出張所となります。これが、近くに移転した丹南小学校(現在の美原北小学校)に引き継がれました。

平成十一年(一九九九)、松原市教育委員会は「学校敷」を含む近接地の丹南遺跡で発掘調査を行いました。十八〜十九世紀の江戸後期から明治初期の遺構や遺物が検出されました。このうち、「学校敷」内で見つかった溝から磁器水滴が出土しており、丹南学校に関する遺物とも考えられます。

本年は、元和九年に丹南藩が立藩して四〇〇年になります。教育委員会文化財課では、これを記念して「丹南陣屋御城印」のご当地グッズを配布しています。陣屋址碑(来迎寺山門前)、明治六年(一八七三)丹南村地籍図、ふるさとびあプラザ展示の丹南遺跡出土遺物の三点の写真を撮ると受け取れます。多くの方々に丹南藩を知っていただくことを期待しています。